

室町時代の敬語

「ござる」「おじやる」「おりやる」について

山 本 和 子

一、まえがき

「いづる」・「おじやる」・「おりやる」はいずれも同一普通語と対立し得る敬語である。これらの語については、ロドリゲスの「日本大文典」(Arte de lingua de Japan)に記されているのを始めとして、近年においても「抄物」・「天草本平家物語」・「伊曾保物語」・「狂言記」等によつて説かれているところである。(註)これらの資料による「いづる」・「おじやる」・「おりやる」の差異は、「いづる」が儀礼的で、尊敬の気持を表わしているのに対して、「おじやる」・「おりやる」は親愛の意味を表わしている

とされている。私は狂言を資料として、「抄物」・「天草本平家物語」・「伊曾保物語」に次ぐ室町時代末期における「いづる」・「おじやる」・「おりやる」について、その用法と、敬語の用いられるところの対遇の關係とから考察して行きたいと思う。次に資料として用いた狂言について少しふれておきたい。

舞台上における登場人物のことばのやりとりを真の姿とする狂言の使用する言葉は、狂言の本質から推しても、日常一般に用いられている言葉が選ばれていた事は当然のことであろう。近世になつて固定されるまでは、詞章及び動作は時代と共に流動していたであろう事は想像にかたくない。従つて、狂言の詞章を室町時

代の国語資料として用いるには、実際に室町時代の舞台上で上演されていた詞章を対象としなくてはならないのであるが、残念なことに、室町時代に行われていた詞章の記録は今日伝っていないのである。

記録に残る古い詞章としては、和泉流の慶長頃の書写と言われる「狂言六義」（天理図書館石田文庫蔵）と、大蔵流の大蔵虎明書写の「狂言之本」（笹野堅代編「古本能狂言集」所収）及び正保三年大蔵八右衛門清虎書写大蔵虎清手訂の「狂言八番」（川瀬一馬代翻字雑誌「椎園」第一輯所載）等いずれも近世初期のものである。このうち最も多くの狂言を収め「寛永十九年」の奥書のある「狂言の本」を資料として用いた。（以後この本を虎明本と呼ぶ）

「虎明本」は各冊の終りに、

「先^キ此授徒者口授^ク之而已面命^シ之而已未^レ曾著^シ之於文字^ニ所謂差^サ之毫釐^ニ謬^ル以^テ千里^ヲ伝^フ之愈遠謬^ル之愈多^シ云々。」

とあることにより、大蔵流における最初の記録であることが知られる。この「虎明本」と大蔵流において虎明本の文の記録と言われる「虎寛本」（岩波文庫能狂言所収、寛政四年書写）との間には著るしい相違が見られる。又虎明が「童子草」に、時代の変り目にあたり、狂言の近世化、歌舞伎化するのを、「狂言の病」で

あると嘆いていることから、「虎明本」の詞章は、近世的变化を受ける前の狂言の姿を伝えるものであり、これによつて室町時代末期の狂言の姿を伺い得ると思うのである。

註 「室町時代の言語研究」・「天草本平家物語の語法」（国語学論考）・「狂言記の敬讓の動詞と助動詞」（国語と国文学八卷一〇号）湯沢幸吉郎氏。「近古の国語」（国語科学講座Ⅴ）土井忠生氏。「日本文法史」（国語科学講座Ⅵ）・「足利時代言語の待遇法」（国語と国文学五卷一二号）小林好日博士。「国語史上の一区劃」（日本文学講座卷十八）春日政治氏。「狂言記の待遇法」（国語と国文学一三卷二号）江湖山恒明氏。

二、「いゝる」・「おじやる」・「おりやる」

の独立動詞としての用法

(一) 活用と意味

(イ) 「いゝる」

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	計
行く	いゝら	いゝり	いゝる	いゝる	いゝれ	いゝれ	
来る	10	2 (21)	6	8		11	58
	10	1 (45)	1	1		44	102

来る	行く		
3		おりやら	未然形
3 (7)	(1)	おりやつ (おりやつ)	連用形
1		おりやる	終止形
	1	おりやる	連体形
		おりやれ	已然形
22		おりやれ	命令形
36	2		計

(ハ) 「おりやる」

計	ある	いる	来る	行く		
	3	2	3		おじやら	未然形
	(1)	(2)	(29)	(5)	おじやり (おじやつ)	連用形
	4	14		1	おじやる	終止形
				3	おじやる	連体形
		1	2		おじやれ	已然形
		5	18	4	おじやれ	命令形
97	8	24	52	13		計

(ロ) 「おじやる」

計	ある	いる
	79	11
	2 (12)	3 (1)
	59	61
	89	39
	21	1
	6	6
541	259	122

計	ある	いる
	1	2
	(1)	
	8	
	7	14
71	17	16

「虎明本」に用いられている「いざる」「おじやる」「おりやる」を、独立動詞として用いられる場合と、補助的に用いられる場合とに大別した。独立動詞として用いられる場合には、「行く」「来る」の意味を表わす場合と、存在概念を表わす場合とがある。「行く」「来る」の意味を表わす場合には、話手と動作の主体との関係において成り立つ敬語であり、動作の主体が、聞手以外の第三者であれば第三者が、又聞手の動作を表わしている場合には聞手が、話手の敬意の対象となるのである。しかし聞手の動作を表わしていても、補助的用法における如く、話手が聞手に対して直接に敬意を表わしているのは異り、あくまでも動作の主体として話手の敬意の対象となっているのである。話手と聞手との関係において成り立つ場合―通常丁寧語と言われるもの―を敬意の直接的表現と名づけるのに対して、話手と動作の主体との関係において成り立つ場合を、敬意の間接的表現と名づける。

具体的な例を二三あげてみると、

御親父様のどれへやらござつた、よふで参れ (二人袴一・656)

やい／＼こうとうの花見におじやるほどに、ささへをもたせて
さきへやれ（さるざとう 二・825）

の如く第三者の動作を表わす場合、話手「舅」・「こうとうの妻」
は、それ／＼動作の主体である「聲の親」・「夫」に対して、又

今夜は宿坊へはござらぬか（くらままいり 二・166）

よそへおじやつたらは、人がぬきまらせうぞ（すゑひろがり

一・82）

の如く聞手の動作を表わす場合には、話手「太郎冠者」・「すつ
ば」は聞手「主人」・「太郎冠者」に間接的に敬意を表わしてい
るのである。現代国語の「おいでになる」に相当する。

又存在概念を現わす「いる」においては、太郎くわじや、と、

さまは内にござるか（ほうちやう聲一・582）

のように第三者の存在を表わす場合には、話手「娘」は動作の主
体「父」に対して間接的に敬意を表現して現代国語の「おいでに
なる」にあたるのであるが、

やれ／＼うれしや、てまがいらふと思ふたれはそのまゝ、との
ふてうれしひ、急でもつてまいらふ…申御さるか／＼（すゑひ

ろがり 一・185）

では、「おいでになりますか。」と聞手に対しての直接的敬意の
表現「ます」を含み、聞手に対しての間接的敬意と、直接的敬意

とを「ござるか。」によつて兼ねていると考えられる。「おじや
る」・「おりやる」においても同様である。

おじやるか／＼たゞいまくだつておりやるは（かゞみ男二・340）
うちにおりやるか／＼是へおでやれ（さるざとう二・823）

更に「いる」の意に用いられる場合には、

いや新座の者はいかほどもござらうが、なんにんがつぎまら
すまひ（はなとりすまふ一・280）

中／＼めつらし鳥がおじやる（さつくわ二・272）

の如く単なる物の存在を表わす場合もあり、この場合には、
終に都へのほつた事が御さらぬ（すゑひろがり一・469）

と同様、話手は聞手に対して直接的に敬意を表現しているのであ
る。

かくの如く、独立動詞として用いられる「ござる」・「おじや
る」・「おりやる」には敬意の対象の異なる場合が含まれているが、
その表わす意味によつて分類したのが前記の表である。

活用は「ござる」・「おじやる」・「おりやる」共にラ行四段
活用である。

「いゝる」・「おじやる」・「おりやる」が「御座ある」・「御
出ある」・「御入ある」から転じた語であることは、ロドリゲス
の「日本大文典」にも記されている。「虎明本」には、このうち

「御座ある」のみが用いられているが、その中の独立動詞としての用法は次の如くである。

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	計
行く	いこう	いこう	いこう	いこう	いこう	いこう	3
来る	くる	(く) (く)	くる	くる	くる	くる	3
いる		(い) (い)	いる	いる	いる	いる	32
ある	ある	(あ) (あ)	ある	ある	ある	ある	35
計							73

「虎明本」においては、「いざある」はその新語形「いざる」と並用されている。

「おじやる」の前形「御出ある」の変形と思われる「御出やる」が、十六例ある。

此春はてられたと言た程に、なおでやつそ(省略)一たびさやうにいふたに、今又おでやれは身共がはぢをかく(ぬし二・456)の例と、同じく「ぬし」の

なふきやうこつや、まづそちへおじやれ

と比較して見ても、「おでやる」という形には、「出る」という

意味を具体的・実質的に存していることが明かである。

うちにおりやるかく是へおでやれ(さるた二・823)

の「おでやれ」は「おじやる」と置き換えられるものであろうが、やはり

用がある、まづおじやれく(さるた二・828)

の「おじやる」との意味には相意を認めざるを得ないのである。

(二) 下への接続のしかた

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ふ・ふずる	まらする	か・ぞ・よ	と・に・が	は・ども	や・かし
ふ・ず・ぬ	音便形(た)	なふ・とも	は・まひ		
ずは・いで		ぞや・も			
ふ・は	音便形(た)	な・か・よ	ほど・まひ	は・ども	や
	な…そ				
ふ・ふずる	音便形(た)	よ・なふ	が・まひ		や
いで・なんで	形	ぞ	ほど		
は	音便形(た)	ぞ・か	に・ほど・と	ども	
	まひ・が・は	まじひ			

これらの助詞・助動詞に、独立動詞としての「行く」「来る」「いる」「ある」のすべての活用形が接続するわけではない。「いざる」の連用形は「まらする」に接続する外

こどもはあまたござり、何共てまへがなりませぬ（ちどり

二・282)

の如く、中止法として用いられた一例がある。「おりやる」の連用形「おりやり」は三例共に

やれ／＼たれぞと思ふたよ、内へおりやりはせひで、とぎまが

ましひよなふ（ほうちやう聲一・577）

の如くに用いられている。

又「ある」の意味を表わすものには、次の様な例もある。

それはともござれ。こゝもとはくれがたになつて、ようじんの

わるひ所じやに、ちといそがせられてよふござらふ（どんごむ

さう 二・137.)

三 話手と聞手との身分関係

対上	いざる	おじやる	おりやる
283			

計	見物	対下	対等
(97)	(2)	(35)	(60)
541	85	24	149
97	2	35	60
71		44	27

()内はいざる

独立動詞として用いられる「いざる」・「おじやる」・「おりやる」の敬意の対称は同一ではない。第三者に対して間接的に敬意が表現されている場合には、聞手は敬意の対象とは無関係に存在している。しかし、聞手に対して間接的に敬意が表現されている場合、又は、存在概念を表わし聞手に対する直接的敬意をも含んでいる場合には、聞手は間接的・直接的に敬意の対象となつているのである。これらを総括して、話手と聞手との間における身分関係を取り上げたのが右の表である。

狂言に登場する人物は、限られたものであるが、「いざる」・「おじやる」・「おりやる」の用いられる対遇の関係を、話手を基本として、「対上」「対等」「対下」「見物」に分類する。

「対上」 社会的に身分の高い人、所謂目上の人に対する関係を一括する。この中に含まれるのは次の如き場合である。

- (1) 下人の主人に対する場合（大名狂言・小名狂言等）
- (2) 下人の主人の家族に対する場合。（「花子」等）

- (3) 下人の主人の客に対する場合。(「松やに」等)
 - (4) 子の親に対する場合。(「いろは」等)
 - (5) 孫の祖父に対する場合。(「やくすい」等)
 - (6) 甥の伯父・伯母に対する場合。(「つり狐」・「伯母ケ酒」等)
 - (7) 男の目をかけらるゝ人に対する場合。(「聲入狂言」等)
 - (8) 男の目代に対する場合。(「牛馬」等)
 - (9) 商売人の買手に対する場合。(「まんじう」等)
- 「対等」 社会的身分において互に同等の場合で、この中に含まれるのは次の如き場合である。
- (1) 下人同志。(「文荷」等)
 - (2) 商売人同志。(「牛馬」等)
 - (3) 僧同志。(「しうろん」等)
 - (4) 男同志。(「連歌盗人」等)
 - (5) 僧と所の者。(「腹不立」等)
 - (6) 夫と妻。(「女狂言」等)
 - (7) 太郎冠者とすつば。(「すゑひろがり」等)
- 「対下」 社会的身分の低い者に対する場合で、「対上」の逆の關係である事は言うまでもない。
- 「見物」 狂言の中の独白文における場合で、特定の聞手に向つ

てはいないが、観象が対象となつていたので、「見物」と名付ける。

「ござる」は、「対上」から「見物」に至るすべての關係において、話手と聞手との關係を結び得るが、「おじやる」・「おりやる」は「対上」の關係を結ばない。又「見物」に属する「ござる」は、第三者の動作を表わして、聞手(見物)が話手の敬意と無關係に存在する場合と、事物の存在を表わして、聞手(見物)に直接的に敬意を表現している場合とを含むが、「おじやる」は、聞手が敬意と無關係に存在している場合に限られる。「対下」に属する「ござる」は、二・三の例の外は、話手の敬意と無關係の聞手として存在している。

(4) 話手と敬意の対象との身分關係

(1) 第三者の動作

対上	対等	ござる			おじやる			おりやる		
		行く	来る	いる	行く	来る	いる	行く	来る	いる
4	7				1	5	1			
8	13						2			
43	10									2

対下	計
	11
	21
	53
	2
	10
	3
	2

「いざる」・「おじやる」・「おりやる」共に「対下」を欠く。
「いざる」よりも一段と敬意の度合の低い敬語と言われている
「おじやる」・「おりやる」が、「対上」の関係において敬意を
表わすのはこの十例に限られている。

「対上」における「いざる」と「おじやる」とを比較してみる
と、

やひくたのふだ人のご。つ。たに、酒があらはだせ、なひ、そ
れはにがくしひ事じゃ（ふじまつ 一・404）

内にあるといふたらは、是へおじやらふか、おじやつ。たらは身
共がいひやうがあつて、御きげんをなさうほどに、きづかひ
なあそばひそ（よびこそ 一・525）

前者は、太郎冠者が家人に、主人の訪問を告げるのであり、後者
は、下人同志が主人の訪問について話しているのであるが、いず
れも話手の敬意の対象は「主人」である。

敬語規定の第一の条件は、話手と敬意の対象との身分関係であ
るが、第二条件として、話手の主体的感情を考えなければならな
い。同一の身分関係にある時、必ずしも同一の主体的感情が伴う

とは限らない。前例においても、前者では、太郎冠者の主人に対
する純粹の尊敬の気持が表現されているが、後者では尊敬という
よりは、主人の訪問を迷惑に思う気持が含まれていて、純粹の尊
敬を表現する「いざる」とは異つていのである。

「対等」の身分関係にある第三者の動作を表わす場合には、
又御親父様のどれへやらござつた、よふで参れ（二人袴 一・656）
やい／＼こうとうの花見におじやる。ほどに、さ、へをもたせて
さきへやれ（さるざとう 二・825）

の如く、前者は、話手「舅」、聞手「太郎冠者」、敬意の対象は
「聾の親」であるが、後者は、話手「妻」、聞手「家人」、敬意の
対象は「夫」である。「舅」が「聾の親」に対する場合と、「妻」
が「夫」に対する場合と、身分的に対等であつても、「親しさ」
において「親疎」の差が認められる。第三者の動作を表わす時に
おいても、「いざる」と「おじやる・おりやる」との間には、は
つきりとした敬意の程度の差が認められるのである。

「対上」の関係にある第三者の動作を、「対上」の関係にある
聞手に話す場合、「ござりまらする」の用いられる事がある。

はや皆／＼此へござりまらする、いやこれへ御ざつて御ざる、

（松やに 一・139）

はなごさまへ御ざりまらした（はなご 一・399）

太郎くわじや、とゝさまは内にござるか

おとうさまでござるか、中くうちにござりまらする(ほうち

やう聲 一・582)

「ござり」は動作の主体(主人の客・主人・主人)に対する話手の間接的敬意の表現であり、「まらする」は聞手(主人・主人の妻・主人の娘)に対する話手の直接的敬意の表現であり、明らかに敬意の対象は異っているのである。現代国語の「おいでになります」というところであろうが、かゝる場合に「御出でござる」「御さつて御さる」等が用いられることもある。

をのくあれへよせられて御さるが、只今へ御いでござる、いやはやこれへ御出でござる。(くじざい人 二・82)

(四) 聞手の動作

計	対下	対等	対上	ござる		おじやる		おりやる	
				行く	来る	行く	来る	行く	来る
47		28	19						
81		51	30						
59	1	21	37	いる					
11	3	8		行く					
42	16	26		来る					
19	11	8		いる					
2	2			行く					
36	34	2		来る					
14	3	11		いる					

「第三者の動作」を表わすのと異り、「おじやる・おりやる」

は、「対上」の關係に用いられることはなく、専ら「対等」・「対下」の關係においてのみ用いられる。又「ござる」は、「対下」の關係に一例見られる外はすべて「対上」又は「対等」の關係において用いられている。「対下」に属する「ござる」は、

天にゆるりとござれ(さつくわ 二・271)

で話手は「大名」動作の主体は「さつくわ」である。身分的に見れば当然「すつば」は「大名」の下に属する。しかし京から伯父と思つて太郎冠者の伴つて来たすつばに對して、「わるうあしらへば後にあたをする」という話手の氣持が、敬意の対象とならない「すつば」に對して「ござる」を使つたのである。

動作の主が聞手の時、「ござりまらする」を用いたのは次の二例のみである。

申くもはやござりまらするか(まんじう 一・487)

もの申く申御内に御ざりまらするか(千切木 一・378)

「ござり」は聞手に対する話手の間接的敬意の表現であり、「まらする」は直接的敬意の表現である。

相手の存在を尋ねる場合に「御さるか」の用いられることは既に述べたが、この「御さるか」は、「おいでになりますか」にあたり、話手の直接的敬意を含んでいる。敬意の表現の意味か

らは、「千切木」の例の「いざりまらするか」と同一になるのである。「いざりまらするか」と同様の言い方に「いざつていざる」というのがある。前述の「いざるか」は詳しく言えば、「いざつていざるか」と言うべき所であるが、それを「いざるか」のみによつて「いざつて」の部分、即ち、直接的敬意の表現されている部分に、間接的敬意をも、含ませようとした表現である。かゝる表現の経済から、話手の聞手に対しての直接的敬意の表現が発展する。

(イ) 事物の存在

	対上	対等	対下	見物	計
いざる	(13) 180	(5) 40		(17) 47	(35) 269
おじやる		8	1		9
おりやる		12	5		17

()内は「いざある」

これらは現代語の、「います」・「あります」にあたり、「いゝる」「ある」等の存在概念を表わすと同時に、聞手に対する直接的敬意としての「ます」をも含むのである。

「いざる」が、「対上」から「見物」のすべての場合に用いられているのに反して、「おじやる」・「おりやる」は「対上」と「見物」を欠いている。「対下」に用いられる「いざる」は、「聞手の動作を表わす場合」と同様、話手の改まった気持が認められる。事物の存在を表わす場合に、「いざりまらするか」が用いられているのは次の一例のみである。

某もお使に参つてゆさんいたした事は御ざりませぬ。(文荷 二・200)

独立動詞として用いられる「いざる」・「おじやる」・「おりやる」の用法と、対遇の関係とは、以上の如くであるが、「いざる」と「おじやる」・「おりやる」との相違は、「いざる」が「対上」「対等」の関係に多く用いられるのに反して、「おじやる」・「おりやる」は専ら「対等」・「対下」の関係に用いられる。又、「いざる」は尊敬の気持を含むか、尊敬とまでは行ななくても、話手は敬意の対象に対してある程度の心理的距離を保っているが、「おじやる」・「おりやる」においては、この距離は極度に短縮されて、むしろ親愛の情が認められるのである。この親愛の情は、更に時には嫌悪の情ともなり得る。「いざる」が「対下」に、又「おじやる」・「おりやる」が「対上」に用いられることがあつても、話手の主体的感情の差は保たれている。

三 「いやる」「おじやる」「おりやる」
の補助的用法

動詞	形容詞	形容動詞	副詞	体言	補助動詞	補助動詞	助動詞	さうだ	なんだ	たい
10	109	3	40	54	9	3	1			1
4	9			3	2	1				
(1)				(14)						
363	128	10	80	870	16	8	16	5	8	3
134	26	4	7	156	10	6	7	19	1	1
49	11	1	9	18	4		1	2		3
2										
563	283	18	136	1115	41	18	25	57	2	10
計										

計	げに	準体助詞「の」
		3
		1
2283	3	1

(1) 動詞には、その連用形に助詞「て」を介して接続する。

動詞に接続する場合を、更に細かく分けると、普通動詞に接続する場合と、敬語動詞に接続する場合とに分けられる。しかし、そのいずれの場合においても、意味から考えると、過去・完了を表わす、即ち現代国語の「ました」に相当する時と、経続を表わす、即ち現代語の「～ています」に相当する時とがある。

見事なくさびらが一本はへてござつたほどに、くわる、くさびらかとぞんじて取てみれば、くわれさうなくさびらでもござなかつたに依て、すてゝござれば、又おなじ所に、まへかどのごとくはへた程に…(くさびら 二・707)

その事、人あまたもつてござれ共、折ふしはラ／＼へつかふてたれもおりなひ、又留守も申付ておいたによつて、自身持つておりやる(船渡聲 一・603)

前者は、過去を表わし、後者は、経続を表わす。

この外に、次の如く「～てきました」の意味を表わす場合もある。

る。

中く寺々へ参つて、ことくきいて御ざる。(かねのね

二・212)

(2) 形容詞には通常その音便形に接続する。形容詞に接続する場合を細分すると、普通形容詞に接続する外、敬語形容詞にも接続する。敬語形容詞には、それ自身敬意を含むもの。

是は又かたじけなふござる、さらは一はい下されう(ぬけがら

二・92)

と、接頭語「お」をつけた敬語

今程はおいそがしう御ざらふ程に、春さうくまいつておとき

仕らふ(八句連歌 三・184)

とがある。これらの割合は次の表の通りである。

計	普通形容詞	
	敬語形容詞 「お」+普通 形容詞 それ自身敬意 を含む形容詞	普通形容詞
283	68	4

音便形との間に助詞を狭むこともある。

もはや参る、なごりおしうこそござれ、これがいきわかれじや

(ぶあく 二・505)

又次の一例は、語尾「う」が省略されている。

まづ山ほがわたりまらしたが、それをひやうしにかゝつてひ
いたがおもしろござつた(ちどり 二・284)

(3) 形容動詞には連用形に接続する。

都のにぎやかさ、申もおろかにござる。(じぜん 一・362)

(4) 体言には助詞「に」「にて」「で」を介して接続するが、これらの助詞と、「ござる」との間に更に、「は」「も」をはさむ事がある。

是へ参るも別の事でもござらぬ(どん太郎 二・490)

ひごろ、清水の観世音をしんじたか故にてもござらふず(ぶあく 一・509)

某一人にては御ざるまひ程に、まづあれへ参つて…(そうはち 二・732)

(5) 準体助詞「の」に「で」を介して接続する。

私ので御ざる程に、ことくこそんじたほどに、申さうが、あれがぞんじたかと仰られひ(ながみつ 三・9)

(6) 補助動詞には、連用形に助詞「て」を介して接続する。

おすゑもつてまいつてござらは、お子さまたちのあそこへく
れい、こゝへくれいと仰られうず(栗やき 二・187)

(7) 助動詞に接続する場合、動詞型の助動詞には通常その連用形

に「て」を介して接続する。

わらはが所の人はよそへとしをとりにおいられてござる。(せつ
ぶん二・56)

さゝへを^ま持^らし^て御^ござ^る。(どぶかつちり 二・794)

又、連体形に「で」を介して接続することもある。

右の御さん用はかさねていたさるゝでござらふず、只今のかは
りはもつてまいつた(ちどり 二・281)

形容詞型の助動詞には音便形に接続する。

道すがら手家がきゝたうござる。(どぶかつちり 二・795)

形容動詞型の助動詞にはその連用形に接続する。

今までもしきやうはならはなんで御^ござ^るよ(腹不立 二・592)
はやできさうに御^ござ^る。(連歌盗人 三・48)

この外「げに」に接続して、

そのうへ私がふがひなふて、名をかへてとらせぬ、など、申^まげ
に^にござ^れども、ばちにたむかたもござらぬによつて、一日く

とその分でござる(426 二・511)

の如く用いられる。

補助的用法として用いられる「ござりまらす」は

御意のことく、うへく^のめでたければ、したく^{まで}よろこ
ふでめでたいおりからでござりまらす。(どんこむさう二・129)

の一例のみである。

(四) 「おじやる」

計	助動詞 れる たい	体言 にて	副 に	形 で	容 詞	動 詞	未然形	
							おじやら	連用形
				1	2	1	3	おじやり (おじやつ)
	1	1	1	33	4	4	12	終止形
		1		2				連体形
								已然形
								命令形
76	1	1	2	1	36	6	5	計

補助的に用いられる「おじやる」は、「ござる」程の広い範囲
を持たないが、接続のしかたは同様である。「ござる」が敬語の
動詞形容詞に接続したのに対して、「おじやる」はこれらの語に
は接続しない。

「おじやる」と「まらする」の接続した「おじやりまらする」は虎明本中次の一例のみである。

中／＼庭にかゝつておしやりまらする（はぎ大名 一・480）

(ハ) 「おりやる」

計	助動詞 さうだ	副 詞 に	体言 で	形容 詞	動 詞		
						未然形 連用形	終止形 連体形
	1		5	2		おりやら (おりやり やつ)	おりやる おりやる
			(1)		(2)		
	1	1	44	3	6		
	1	1	1	12	1		
					1		
					1		
90	1	3	2	62	6	16	計

「おりやる」も、「おじやる」と同様、「いざる」程の広い範囲は持たないが、接続のしかたは、「いざる」と同様である。

又、「おじやる」と同様、敬語の動詞、形容詞等に接続しない。

次に「いざる」の前形「いざある」の上からのうけ方と活用を

記す。

計	助動詞 やうだ	られる等	補助動詞	副詞	にて	体言 に	で	形容動詞	形容詞	動詞			
											未然形 連用形	終止形 連体形	
				10			6		11	4	ござあら	未然形	
					(2)		(8)	1			(ござありあつ)	連用形	
	2	4		5	11	1	58	1	14	24	ござある	終止形	
	1		2	3	7		14		3	25	ござある	連体形	
										5	ござあれ	已然形	
										1	ござあれ	命令形	
223	1	2	4	2	18	20	1	86	2	28	59		計

(ニ) 下への接続のしかた

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ご ふ・ふずる	ご まらする	ご ぞ・よ・の	ご が・に・まひ	ご は・ども	
ざ はぬ	ざ 音便形—たて	ざ なふ・とも	ざ と・ほど		
る ふ・ぬ	る まらする	る か・ぞ・よ	る が・は		
お ふ・なんだ	お 音便形—た	お ぞ・よ・の	お が・は・まひ		
やり ふ	やり 音便形—た	やり げな	やり との・ほど		
ご ふ・ふずる	ご たり	ご か・ぞ	ご が・まひ	ご ども	
あ は	あ 音便形—た	あ げな	あ に・ほど		

独立動詞の場合と同様、補助的に用いられるすべての場合に、これらの助詞・助動詞が接続するわけではない。「いざる」の連用形は、「まらする」に続く一例の外、中止法としても用いられている。

三 話手と聞手との身分

対上	いざる	おじやる	おりやる
(103)	1335	1	

対等	対下	見物	計
(24)	(96)	(223)	(2285)
396	2	552	76
62	12	1	90
50	40		

()内は「いざる」

補助的に用いられる「いざる」・「おじやる」・「おりやる」は、少数の例外を除いて話手の聞手に対しての直接的敬意を表わしている。独立動詞の場合と同様「いざる」は主として「対上」「対等」及び「見物」の關係に用いられ、「おじやる」・「おりやる」は「対等」「対下」の關係に用いられる。

「対下」に属する「いざる」は、既述の「さつくわ」の例で、「大名」と「さつくわ」との關係である。又、「対上」に属する「おじやる」は

中／＼庭にかゝつておしやりまらする(はぎ大名 一・480)

で、話手は「太郎冠者」・「聞手」は「主人」であるが、話手は「おじやる」によつて聞手に敬意を表わしているのではなく、聞手への敬意は「まらする」にあり、「おじやり」は庭の持主に対しての敬意の表現なのである。従つて聞手は敬意の対象とはならない。敬意の対象との身分關係を見れば、「対等」に属すべきものである。又、「見物」に属する「おじやる」も、「見物」に対

しての直接的敬意の表現ではない。即ち

やれ／＼待かねておじや、ふか急でかへらふ（あさう一・240）

で、現代国語の「おいでになるだろう」に相当するのである。

同一人の聞手に対しても、話手の主体的感情の変化によつて、

「ござる」が「おじやる・おりやる」に変ずることがある。

言葉をかくるも別成事でもござなひ、さやうのおかたがあらはおきまらしたひと申事でござるがござらふか（はなとりすまふ

一・285）

右は、主人の命令で、海道まで新参の下人を探しに行つた太郎冠者が、通りかゝつた男にかけた言葉である。が同道して、同一の主人に仕えることになり、主人の前に出てからは、

目でつかふて見うとおしやる程に、お目のまいるかたへおじや

れや（同・一・291）

と「おじやる」が用いられている。即ち、単なる通で行き合つた未知の人として「ござる」を用い、同一の主人に仕える下人同志となつた時、「おじやる」を用いる。そこには話手の聞手に対しての心理的距離は著るしく変化を示しているのである。又「おじやる」は次の如く互になぶり合う気持からも用いる。

かりそめに御目にかゝつてお供いたすも他生の縁でござる、仰

のことくさやうでござる（しうろん 二・714）

そなたはどれから都へおのほりやるぞ、身共は都辺度の者で

おじやる（同・二・765）

旅僧が、立つて都に上る途中、互に「れいのじやうこは者にまいりあふた、路すがらなぶらふ」という気持が、この兩人の物言い

を、「ござる」から「おじやる」に変えさせたのである。

補助的に用いられる「ござる」・「おじやる」・「おりやる」も、独立動詞として用いられる場合と同様、敬意の程度に明確な差が認められるのであるが、虎明本には、

代物はいかほどでおじやるぞ（すゑひろがり 一・84）

代物はいかほどでござるぞ（はりだこ 一・101）

の如く、同型の狂言において、相異のみられることがしばしばある。この様な異同は、「虎寛本」には見られないのである。

四、「いざる」・「おじやる」・「おりやる」

の打消の言い方

（一）「いざる」の打消

「いざる」「いざるある」の打消に「いざらぬ」と「いざない」

とがある。この言い方については、土井忠生氏が、

「打消にラ行四段活用によつて「いざらぬ」といふのは、原

儀に用ひた場合のみであつて、その他丁寧語として用ひた場合には「いぢぢなう」「いぢぢるまう」である。(近古の国語—国語科学講座V)

と述べられ、又春日政治博士も、

「崇敬の方はゴザラヌといふが、丁寧語の方はゴザナイといふのであつて、二つが明瞭に区別されてゐる」(国語史上の「区劃—日本文学講座」)

と書かれている。事実「天草本平家物語」において用いられている「いぢぢらぬ」は四例あるが、いずれも、

Aru nhōbō Daicacuji ye maitte mōxitaua Sammino
chūgō dono coso tōyina Yasima ni gozaranuto, mōxeba...

(ある女房、大覚寺へ参つて申したは、三位の中將殿こそ當時は八島にいぢぢらぬと申せば……卷二・第七)

の如く、第三者の動作について用いられている。これに比べて、「いぢぢなう」は、

Cocoro ni macaxenu uqimi degozareba, isogui mairu ca

tomo gozanaxi……

(心に任せぬ憂身でいぢぢれば、急ぎ参る事もいぢぢなし……卷一第十一)

nami da no nagaxi sode no xihoranu ua gozanacatta to

mōsu

(泣を流し袖を絞らぬはいぢぢなかつたと申す 卷一第十一)の如く用いられている。

又、「伊曾保物語」には「いぢぢらぬ」は一例もなく、「いぢぢない」のみが用いられている

coreco so vomniu taixeltni nomō mononare : najeni-
toyūni vonnaua vottouo taixeltni vomo, toi yedemo,
Xinjittdeua gozanai:

(これこそおん身を大切におもふものなれなげにと言ふに女は夫を大切に思ふといへども真実ではいぢぢない。423)

「虎明本」における「いぢぢらぬ」と「いぢぢなう」と比較してみると、独立動詞の場合は、

	行く	来る	いる	ある	計
いぢぢらぬ	1	1	4	(3)	75
いぢぢなう			17	73	(3)
					81
					90

()はいぢぢらなんだ

の如く、「いぢぢらぬ」は、「行く」「来る」の打消に用いられるが「いぢぢない」は用いられることはない。存在概念を表わす「いる」「ある」の打消には、「いぢぢらぬ」「いぢぢなう」いずれも用いられる。

次に補助的な用法においては、

	形容詞	形容動詞	動詞	体言	副詞	助動詞	計
いざらぬ	22	1		32	14	1	70
いざない	2			(4) 45	(1) 7		(5) 54

右表の如く、「いざらぬ」「いざない」共に用いられ、その数もほぼ同数に近いのである。補助的に用いられている「いざらぬ」と「いざない」の間には、使い分けは見られない。「天草本平家物語」や「伊曾保物語」には見られなつた現象である。キリシタン物の前記二書において、はつきりと境界線の引かれていた、「いざらぬ」と「いざない」との間において、「いざらぬ」が従来の「いざない」の領域にまで入り込んだ姿を「虎明本」に見ることが出来る。更に、「虎寛本」においては、「いざらぬ」のみ用いられ、「いざない」の用いられていないことから、やがて「いざらぬ」が「いざない」に替つて行くことは明かであるが、その過渡的な姿が、「虎明本」におけるこれらの語の姿であり、室町時代末期における「いざる」の一面でもあるのである。

(二) 「おじやる」・「おりやる」の打消

「おりやる」・「おじやる」の打消に、当然「おりやらぬ」・

「おじやらぬ」が考えられる。がこの外に「おりない」と言うのがある。これらの語についても、前記の春日博士の記述に、

丁寧のゴザナイに対して崇敬のゴザラヌがあるのと同様であつて、丁寧がオリナイで崇敬がオチャラヌであると言ひうるであらう。(国語史上の一区劃)

と記され、「いざらぬ」「いざない」と同様に使い分けられている事を「伊曾保物語」・「天草本平家物語」を中心に述べられている。「天草本平家物語」において、「おじやらぬ」は、

vôitono coreno govôrerarete, Guenjiua vouô (不明) mo nacatta monovo, dairiya goxono yacaxeta coso yasucarane: Noto donoua vogiaranuca? fitoicusa mesarei to attaraba...

(大臣殿これを御覽せられて「源氏は多くもなかつたものを内裏や御所を焼かせたこと安からぬ、能登殿はおじやらぬか? 一軍召されい 卷六第十六)

の一例のみで、「おりやらぬ」はなく、「おりない」は次の如く用いられている。

yomo vorinai fodonni (用意もおりないほどに 卷三第二)

「伊曾保物語」には、「おじやらぬ」・「おりやらぬ」共に一例もなく、「おりない」のみ見られる。

chiyeno tageta monono cono fitoni narabu cotoua

vorinacatta

(智慧の長けたものも可人に並ぶことはおりな

かつた 409)

「虎明本」には「おりやらぬ」に一例もないが、「おりやらぬ」の過去「おりやらなんだ」が二例と、「おじやらぬ」が一例ある。これらの語と「おりない」と比較してみると、先ず独立動詞としては、

	行く	来る	いる	ある	計
おじやらぬ		(2)			
おりない	7	31	1	(2)	1
	38				

(1)は「おりやらなんだ」

右表の如く、「おりやらなんだ」二例が、「来る」の意味の打消に用いられているが、「おじやらぬ」「おりない」は、存在概念を表わす「いる」「ある」の打消に用いられる。更に補助的用法においては、「おりない」に限られている。「虎寛本」では、「おりない」が直接的敬意の表現にのみ用いられていて、「おじやらぬ」「おりやらぬ」は見られない。「おじやらぬ」「おりやらぬ」と「おりない」との間には、「いざる」と「いざる」との間に見られた様な現象はない。

即ち、キリシタン版の諸本に見られた、「いざる」「おじやる」「おりやる」の打消の原則が、「虎明本」においては、「おじや

る」「おりやる」の打消、「おじやらぬ」「おりやらぬ」(虎明本においては正確には「おりやらなんだ」であるが)と「おりない」との間にもみ保たれているのである。

五、結 び

平安時代の「侍り」、鎌倉時代の「候」と同じく、「いざる」「おじやる」「おりやる」も、動作の主体に対しての話手の間接的敬意の表現から、聞手に対しての話手の直接的敬意の表現へと変化した。更にそのいずれの場合においても、これらの語に敬意の程度の差のあることは、待遇の関係からも明かなことである。「いざる」が他の語よりも一段と敬意の程度の高い語で、話手と敬意の対象との間には、尊敬の気持があるか、又はある程度の心理的な距離が保たれているのに対して、「おじやる」「おりやる」は、むしろ親愛の情・近親の気持を表わし、更に転じては、軽蔑・嫌悪の情をも表現し得るのである。かゝる敬意の差は、必然的に用法上にも表われ、「いざる」のみが、敬語の形容詞・動詞等に接続し、直接的に聞手に対しての話手の敬意を表現しているのである。

コイヤード、「日本語文典」(Ars grammaticae Lingvæ)に

「命令的に呼ぶためには、下僕或は目下の者に対しては *coi* といふ。それほど目下ではないものに対しては *iorai* ^{イオリ} といひ、*naxei* ^{ナクセイ} は少し上品な言ひ方、*nogiare* ^{ノギヤレ} は更に上品な言ひ方である。*gozare* ^{ゴザレ} *gozaro* ^{ゴザロ} は敬意を表す言ひ方である。(大塚高信訳「コイヤード日本語文典」(五八頁))

と記されていることは、「虎明本」においても肯定できる事実である。

又ロドリゲスは、「日本大文典」(*Arte de lingua de Japan*)に「来る」の命令法について。

1 *Coi* 2 *Irai* 3 *Voriare* 4 *Vogiare* 5 *Gozare* 6 *Gozaro*
7 *Voidenasarei* 8 *Voidenasareo* (十四才)

と記し、「おじやる」を「おりやる」よりも一段と敬意の程度の高い語としているが、「虎明本」からは、この区別は得られなかった。

敬語は使い慣れて来ると、次第に敬意が稀薄になる。「抄物」・「天草本平家物語」・「伊曾保物語」で、常に「いざる」は単独で使用されていたのに反して、後の狂言記程の頻度ではないが、「いざりまらす」が用いられている。多くは、「いざり」と「まらす」とその敬意の対象を異にし、現代国語の「…がございます」・「…びやうございます」の「いざります」に相当するものは「

例にすぎない。当時は、まだ「いざる」単独で十分高度の敬意を表現し得たものではあつたが、「いざりまらす」が既に用いられているという事も、「いざる」の打消、「いざらぬ」と「いざない」との間に、キリシタンの諸本に見られた原則の破られつゝある事と共に、近古から近世へと移行行くこれらの語の過渡的な姿を示すものに外ならないのである。

— 完 —